崔国輔詩に対する殷璠の評価「婉孌」が意味するもの

宮下　聖俊

はじめに

「婉孌」とは、『河岳英霊集』において殷璠が用いた言葉である。

『河岳英霊集』とは、盛唐人である殷璠が、殷璠なりの価値基準にもとづいて、盛唐の詩人二十四人の詩について論評したものである。盛唐人である殷璠が、盛唐人の詩つまり編者自身と同時代人の詩を論評しているところがその特徴である。これは、それまでの詩論、たとえば鍾嶸の『詩品』などが過去の詩人や作品のみを論じているのとは、はっきりと異なった特徴である。

このことから『河岳英霊集』は、唐代人の詩に対する見方、すなわち唐代人の詩論を検討する際に貴重な資料となる。また、論評だけではなく、実際に各詩人の詩を数首ずつ選び収めていることも『詩品』などとは異なった特徴である。

小論で検討する盛唐の詩人崔国輔も、二十四人の一人として選び取られ、その詩十一首とともに論評されている。そのなかで、崔国輔の詩に対する評価として「婉孌」という言葉が用いられているのである。

まず、崔国輔の詩に対しての殷璠の論評の全文を挙げておきたい。

国輔の詩、「婉孌」「清楚」にして、深きこと宜しく諷味すべし、楽府数章は、古人も過ぐること能はざるなり。

国輔詩、婉孌清楚、深宜諷味、楽府数章、古人不能過也。

版本によって若干の文字の異同があるが、基本的にはそこに挙げてある一文と意味するところは変わらない。前後の文はなく、ここに引用したわずか二十一文字がその全文である。(1)

文中の「諷味」という言葉は、「言葉をかみしめて味わう」という意味である。『文心雕龍』の用例を見ておきたい。「離騒」に対しての評価が列挙されている箇所に次のように見える。

…漢の宣帝ともなると、すっかり感じ入ってこう考えた――離騒はすべてが経書の説くところと一致する、と。揚雄は諷誦玩味した結果「その形式は『詩経』の雅と同じである」と言う。……(略)　(戸田浩暁『新釈漢文大系　文心雕龍』明治書院)

及漢宣、嗟歎以為皆合経術。揚雄諷味、亦言体同詩雅。(『文心雕龍』辯騒第五)

ここでは、揚雄が「離騒」をかみしめるようにしっかりと味わった結果、それを「雅」であると評価を下している。「諷味」とは、言葉をかみしめるようにしっかりと味わうという意味だと理解できる。

このことを踏まえると、殷璠の崔国輔詩に対する評価は次のように通釈できる。

国輔の詩は、「婉孌」「清楚」であり、深い内容を持っているからかみしめて味わったほうがよい、楽府のいくつかについては、いままでこれほどのものを作れた者はいない。

それでは文中の「婉孌」「清楚」とはどのようなことを意味しているのであろうか。これらはそれぞれ畳韻・双声の言葉であるが、「婉孌」「清楚」という言葉の意味がはっきりすれば、この一文の意味するところ、つまりは殷璠が

崔国輔の詩のどこに着目して、どのように評価していたのかがはっきりするはずである。ただ、「清楚」については、それ以前の用例が全くないなど、さらなる検討を要する問題を残している。そのため、今回は「清楚」についての検討は保留し、「婉孌」という評価を中心に検討を進めていきたい。

この「婉孌」という言葉、『河岳英霊集』のなかでは、この崔国輔に対する評価の中でしか用いられていない。ただ、殷璠が「婉孌」という言葉を用いた例がもう一つある。同じく殷璠が編纂した『丹陽集』にそれは見える。この『丹陽集』はすでに散逸しているが、『吟窗雑録』に引用されて、いくつかの詩や詩評が残っている。(2)

その中で、「処士」である「余延寿」に対しての評価として、「延寿の詩は婉孌艶美なり（殷璠曰、延寿詩婉孌艶美。）」と「婉孌」という言葉が使われている。いま注目したいのは傍点をつけた「艶美」という言葉である。

ここには「婉孌」と「艶美」という言葉が、同時に用いられている。このことから、殷璠にとっては「艶やかで美しい」ことと「婉孌」であることとは矛盾しないものであることがわかる。

もうひとつ、「艶美」と似た言葉として、殷璠は「軽艶」という言葉を用いている。次に示すように、『河岳英霊集』の「敍」にそれが見える。（詳しくは後に述べる）

然挈瓶膚受之流、責古人不辯宮商徵羽、詞句質素、恥相師範。於是攻異端、妄穿鑿、理則不足、言常有餘、都無興象、但貴軽艶。雖満篋笥、将何用之。

これら「婉孌」や「軽艶」という、一見すると大差の無いようなこれらの言葉は、殷璠にとってはそれぞれどのような概念であり、そしてそれらはどのように使い分けられているのだろうか。この点を明確にすることが、拙論の目的である。

先に結論を述べれば、次のようになる。

第一に、崔国輔の詩は、声律面をも含む言葉の用い方に対する配慮から、若々しい女性のような美しさ、という雰囲気を醸し出しており、そのことを殷璠は「婉孌」という言葉でプラスに評価している。

第二に、「軽艶」とは、綺麗で調子よく軽快な、しかしそれだけでしかない南朝風の「宮体」詩の特徴を表している。そして、この「軽艶」を、殷璠は否定的な評価を表す言葉として用いている。

これが拙論の結論である。

一　先行研究概観

まず論の手順として、先行研究を見てみたい。

後世「崔国輔体」と呼ばれるような、崔国輔の詩の詠みぶりを論じた王志民氏の論文には次のようにある。

這些評論総括起来有三点：一是説崔国輔擅長写五言絶句、二是説他的詩内容和形式都比較好、「有楽府遺意。」三是他的詩風格清心流暢、宛転可歌。這大概就是「崔国輔体」的基本特徴了。

王志民「浅析〝崔国輔体〟」（内蒙古師範大学『語文学刊』一九八九年第四期）

王志民氏は、崔国輔に対する殷璠の評価を承けて、崔国輔詩の特徴の三番目として傍線部のように述べている。

「彼の詩は、雑念が無い心境で（詠まれたように）よどみなく滑らな風格を持っており、抑揚があって転がるように快いから声に出してうたうのに良い。おおむねこれが「崔国輔体」の基本的特徴と言えよう」というのである。

これは殷璠の、崔国輔の詩に対する評価をもとにしているようである。しかし、王志民氏はこの殷璠の言葉を真っ正面からは論じていないので、殷璠の、どの言葉をどう解釈しているのかは明確でない。

次に、『河岳英霊集』の詩と評語を含めた全体に、初めて注をつけた王克譲氏の解釈を見てみたい。王克譲氏の『河嶽英霊集注』（巴蜀書社二〇〇六年七月二六八頁）で当該箇所の「婉孌」に次のように注している。

婉孌：美好貌。《漢書・叙伝》下：「婉孌董公、惟亮天功。」顔師古注：「婉孌、美貌。」

『漢書』における用例と、それに対する顔師古の注を論拠に、「婉孌とは美しい様子（婉孌：美好貌）」と注している。

ここで挙げられている『漢書』の原典を確認してみると、次の箇所にそれは見える。

孝哀彬彬、克髓威神、彫落洪支、底剷鼎臣。婉孌董公、惟亮天功、大過之困、実橈実凶。述哀紀第十一。（『漢書』叙伝第七十下）

ここでの「婉孌」とは、「董公」すなわち「董賢」が若く美しいということをあらわすために用いられている。前後の文脈から、その若く美しい「董賢」に大任を任せたために、問題が生じたと述べられている。ここではその若く美しいということが、マイナスの評価につながっているのである。

王克譲氏が、なぜこの『漢書』における用いられ方をふまえてこの注をつけているのかいささか腑に落ちないところがある。なぜなら、殷璠の崔国輔に対する評価は、「婉孌」であることをプラスに評価しているように見えるからである。そしてそのことと、『漢書』の用例との間には若干の齟齬があるように見えるからである。

では、「婉孌」という言葉はマイナスの評価として用いられる言葉なのだろうか、それともプラスの評価として用いられる言葉なのだろうか。次に、「婉孌」という言葉自体がどのような意味として用いられてきたのかを見てみたい。

二「婉孌」という言葉の用いられ方

「婉孌」のもっとも古い用例は、『詩経』斉風の甫田に次のように見える。

婉たり孌たり、総角丱たり。

婉兮孌兮、総角丱兮。

このように童子のさまを表している経文に、鄭玄は次のように箋をつけている。

婉孌、少好貌。

「婉孌は、少く好き貌。」すなわち、童子のさまを表している「婉孌」とは、「若々しく美しい様子」を意味していると言っている。

これを唐代の孔穎達も踏襲している。『詩経』（曹風・候人）の経文に同じように「婉たり孌たり、斯の季女（婉兮孌兮、斯季女）」とあり、そこに次のように疏をつけている。

以季女謂少女・幼子、故以婉為少貌、孌為好貌。

「季女」とは「若く幼い女や男のこと」である、だから「婉」とは「若々しい様子」で「孌」とは「美しい様子」である、というのである。

これらの「婉孌」は、プラスの価値を持つ言葉として用いられているようだ。少なくともマイナスの価値を表す言葉ではない。

では次に、『文心雕龍』楽府篇の用例を見てみたい。「婉孌」が用いられているのは、歴代楽府を論評している箇所

である。

若夫艶歌婉孌、怨詩訣絶、淫辞在曲、正響焉生。

戸田浩暁氏はこの箇所を次のように通釈している。(3)

あの、若い女の美しさをうたった艶歌や、二心ある男と訣別する気持ちを述べた怨詩のようなものは、すでに度を過ぎた文辞が楽曲に載せられているのであるから、そこから正しい音楽が生まれるわけが無い。

「婉孌」を「若い女の美しさ」と解釈している。

同じ箇所について興膳宏氏は次のように通釈している。(4)

なまめかしい恋の歌や、離別の怨恨をうたう歌は、節度を失った歌詞が曲に乗せられており、正しい音響がどうしてそこから誕生し得よう。

やはり興膳氏も「婉孌」を「なまめかしい」と解釈している。

『文心雕龍』における用例は、「婉孌」という言葉を、詩が「若い女の美しさ」を持っているということを表すために用いているようだ。しかしそのことが「正しい音楽が生まれない」原因と指摘されているこの文脈では、「婉孌」はよい意味では用いられていない、と判断される。

別の例として、唐代の陳子昂の用例を見てみたい。陳子昂の「唐の故袁州参軍 李府君の妻 清河の張氏の墓誌銘（唐故袁州参軍李府君妻清河張氏墓誌銘）」（『陳拾遺集』巻六）に次のようにある。

夫れ其の窈窕の秀でたるは、婉孌の姿たり、貞節は寒松より峻たり、韶儀は温玉より麗し。

夫其窈窕之秀、婉孌之姿、貞節峻於寒松、韶儀麗於温玉。

弔われるべき「張氏」を形容して、「美しさが抜きんでていて、『婉孌』の姿をしている、貞節さは冬になっても葉を

落とさない松よりも厳しく、美しいさまは滑らかでつややかな玉よりも麗しい」といっている。

ここでは畳韻語である「婉孌」が、『詩経』にあり同じく畳韻語である「窈窕」と対になって用いられている。また「貞節」や「韵儀」という言葉とともに用いている。したがってこの文脈から判断して、「婉孌」はプラスの価値を持つ言葉として用いられていると考えられる。つまり、「婉孌」は、子どもや女性の「若々しく美しい姿形」を表す言葉であると考えられる。

これまでの検討から、「婉孌」という言葉が、「若く美しいこと」をあらわすことは間違いないと考えられる。ただ、「婉孌」それ自体は、プラス・マイナスの評価を含まない、そのどちらともなりうる言葉であり、プラス・マイナスの価値を決めるのはその語が置かれた文章の文脈による、そのように判断すべきであろう。

三　「軽艶」とは

次に一見するところ「婉孌」とよく似た概念を表すように思える「軽艶」という言葉を検討しておきたい。「軽艶」はプラスの意味で使われるのか、マイナスの意味で使われるのか。

先に示したとおり、殷璠は『河岳英霊集』の敍において「軽艶」という言葉を用いている。「詩を作るのに平仄ばかりに拘る理由などどこにも無い」という文脈において、次のように述べている。

ところがあさはかな連中は、昔の人が声律をわきまえておらず、辞句が質素だととがめだてて、これらを学ぼうとしない。このことから彼らは「異端」ばかりを学び、でたらめに「穿鑿」して、「理」（内容）は足りないのに、「言」（表現）は有り余っていて、ひとつも「興象」は無く、ただ「軽艶」な詩ばかりを貴んでいる。このような

（「軽艶」な）詩ばかりがいくら集まっても何の価値もない。

然挈瓶膚受之流、責古人不辯宮商徵羽、詞句質素、恥相師範。於是攻異端、妄穿鑿、理則不足、言常有餘、都無興象、但貴軽艶。雖満篋笥、将何用之。

批判的な意味、すなわちマイナスの価値を表す言葉として「軽艶」を用いているようである。

では、「軽艶」なる詩とはどのようなものなのであろうか。

この「軽艶」とは簡文帝蕭綱や南朝時代の庾信が詠んだような、梁代以降に流行した宮体風の詩を意味している。例えば『梁書』巻四・簡文帝紀には次のようにある。

太宗…（中略・筆者）…雅好題詩、其序云「余七歳有詩癖、長而不倦。」然傷於軽艶、当時号曰「宮体」。

太宗（簡文帝蕭綱）はつねに詩を作ることを好んだ。しかしその詩は「軽艶に傷（そこな）」ふものであった。そしてそのような詩を「当時号して『宮体』と曰ふ」と、その当時の人が「宮体」と呼んでいたと述べている。

また『周書』巻十三・趙王宇文招伝には次のようにある。

趙僭王招、字豆盧突。幼聡頴、博渉群書、好属文、学庾信体、詞多軽艶。

宇文招は詩を作ることを好み「庾信の体」を学んだ。このことから、その「詞」（ことば）は「軽艶」なるものがほとんどであった、というのである。

これらの例から、「軽艶」な詩とは、簡文帝蕭綱や南朝時代の庾信が詠んだような、梁代以降に流行した宮体風の詩を意味していると考えられる。

この「軽艶」な詩、とは具体的にどのような特徴をもつものなのか。小尾郊一氏の論文「艶歌と艶」（「広島大学文学部紀要」第二十五巻一号初出・東海大学出版会『古楽府』所収）では次のように述べられている。

まことに簡文帝の詩は御歌所派の歌の如く、深刻味がなく、きれいごとにできており、その表現は綺麗で調子よく軽快である。恐らく、こうした調子を当時「軽艶」と考えていたのではなかろうか。（傍点筆者）

このような点が、「軽艶」なる「宮体詩」の特徴といえるようである。

先ほど検討したとおり、「婉孌」がプラス・マイナスどちらの価値を持つ場合でも用いられていたのに対して、この「軽艶」は、マイナスの価値をもつ時にのみ用いられるものだと考えられる。

では、殷璠の崔国輔に対する評価のなかで用いられている「婉孌」は、どのような意味として用いられているのであろうか。次にはそれを見てみたい。

四 殷璠の用いた「婉孌」とは

崔国輔に対する殷璠の評価のなかで用いられている「婉孌」は、どのような意味として用いられているのであろうか。

ここでは参考として、まず『漢語大詞典』の「婉孌」の項目（第四巻三百八十頁左）を見ておきたい。五番目の意味として「委婉含蓄（言葉遣いが婉曲で深い内容がこめられている）」という意味項目を立て、そこにこの殷璠の用例が引かれている。

⑤委婉含蓄。唐殷璠《河岳英霊集・崔国輔》「国輔詩，婉孌清楚，深宜調味。」

確かに、崔国輔の詩を読んでいると、そのような「委婉含蓄（言葉遣いが婉曲で深い内容がこめられている）」という特徴を持っていると感じられる。

試みに、崔国輔の詩をひとつ見ておきたい。「魏宮詞」という詩である。

魏宮詞　　崔国輔

朝日点紅粧　　朝日紅粧に点ずれば
擬上銅雀台　　銅雀台に上らんと擬す
画眉猶未竟　　眉を画くこと猶ほ未だ竟らざるに
魏帝使人催　　魏帝人をして催がしむ

ここには「魏帝」に呼ばれた宮女が、いそいそと身繕いをしているさまが画かれている。一見するとただそれだけである。しかしこの詩に対しては、魏の文帝曹丕が、父親である曹操が死ぬと同時に、曹操の宮女を吾が者としてしまったという浅ましい姿が詠み込まれており、権力者の姿が諷刺されている、という解釈が一般的に為されている。（なおこの詩の解釈については、さらに多様な可能性を持っていると発表者は考えており、それは現在準備中の別稿で公表したいと考えている。）

まさに『漢語大詞典』が指摘するとおり、崔国輔の詩は「委婉含蓄（言葉遣いが婉曲で深い内容がこめられている）」という特徴を持っているようである。そして殷璠は、同時代人を代表する詩人の一人としてその崔国輔を選び取っている。崔国輔の詩がもつ、そのような特徴をきちんと捉えて評価しているはずである。

しかしこの特徴を、殷璠は『漢語大詞典』の言うように「婉孌」という言葉で表しているのであろうか。そうではない、と筆者は考えている。このあと、このことについて順次述べていきたい。

もう一度、崔国輔の詩に対する殷璠の評価を見ておきたい。

国輔の詩、「婉孌」「清楚」にして、深きこと宜しく諷味すべし、楽府数章は、古人も過ぐること能はざるなり。

国輔詩、婉孌清楚、深宜諷味、楽府数章、古人不能過也。

傍線部「深きこと」とあることに注目したい。崔国輔のこの詩の内容面での特徴は、この「深」という語がそれを示している、と筆者は考える。なぜなら「婉孌」「清楚」が詩の外的な表現面の特徴を表していると考えられるのに対して、「深きこと宜しく諷味すべし」という表現は内的な特徴を表していると考えられるからである。

なぜそのように考えられるのか。それは、殷璠が詩人を論評するとき、一般的に表現面の特徴と内的な特徴とを対にして示すという方法を用いているからである。

そのような例として、殷璠が崔署という詩人の詩を論評したものを見てみたい。

署詩言詞款要、情興悲涼、送別登楼、俱堪涙下。

崔署の詩は、「言詞款要」で「情興悲涼」だ、とある。ここでは「言詞」と「情興」とを対にして論評している。このことから、「言詞」とは、言葉という表現面についてを概括したもので、「情興」とは、詩の内的な内容面についてを概括したものと考えられる。

「言詞款要」が詩の外的な表現面の特徴を表し、「情興悲涼」が詩の内的な内容面の特徴を表していると考えられるのである。

このように、表現面の特徴と内的な特徴を対にして示すやり方は、殷璠が詩人を論評するときに用いる一般的な方法である。このことから、崔国輔の詩に対しての評価のうち、「婉孌」「清楚」が詩の外的な表現面の特徴を表し、「深きこと宜しく諷味すべし」が内的な特徴を表していると考えられるのである。

このように検討してくると、『漢語大詞典』の言う、「婉孌」とは「委婉含蓄（言葉遣いが婉曲で深い内容が込めら

れている)」という意味である、という解釈に対しては次のような二つの疑問が湧いてくる。それは、まず、果たして「婉孌」という言葉に「言葉遣い」と「深い内容」との両面の意味が含まれているのであろうか、そして第二に、そもそも「婉孌」の「婉」は「婉曲」の「婉」なのであろうか、というものである。

第一の疑問については、先ほど検討したとおり、「婉孌」は詩の外的な表現面の特徴を表した箇所の一部として用いられていたので、「言葉遣い」と「深い内容」の両面がそこに含まれているとは考えにくい。また二つめの疑問についても、先ほど検討したとおり、「婉孌」とは、プラス・マイナスどちらの価値があるかは別にして、二文字で意味をなす畳韻語であり、それ一語で「若々しく美しい姿形」という意味を有する言葉であった。

それでは、殷璠は「婉孌」という言葉を、プラスの価値として用いているのであろうか、それともマイナスの価値として用いているのであろうか。それは改めて言うまでもなく、「婉孌」が用いられている文の文脈から判断すべきことである。

煩瑣になるが、ここでもう一度、崔国輔に対する殷璠の評価を見ておきたい。殷璠は、崔国輔の楽府を特に高く評価していた。

国輔の詩、「婉孌」「清楚」にして、深きこと宜しく諷味すべし、楽府数章は、古人も過ぐること能はざるなり。

国輔詩、婉孌清楚、深宜諷味、楽府数章、古人不能過也。

殷璠は、「婉孌」である崔国輔の詩は、特に楽府が優れている。昔の人でこれほどのものを作れた者はいない、とまで言っている。やはり崔国輔は詩、特に楽府に優れていたのであろう。このことは殷璠が『河岳英霊集』に選び取った崔国輔の詩十一首のうち、その三分の二以上である八首が楽府詩であることからも窺うことができる。

では殷璠が優れた「楽府」だと評価するものとは、いったいどのような点で優れていたのであろうか。そのことについては、次に挙げる『河岳英霊集』の「論」に基づいて検討を加えたい。

漢魏から晋宋まで、すばらしい詩を遺した者は十数人いるけれども、それでもそれらの人が作った「楽府」を見てみれば、小さな欠点はあるようだ。

自漢魏至于晋宋、高唱者十有餘人、然観其楽府、猶有小失。（『河岳英霊集』論）

『河岳英霊集』の「論」では、全体として詩の「声律」面について論じられている。その中でこのような発言がある。つまり、「小さな欠点」とは、声律面の欠点ということだと考えられるのである。実はこの「声律」という面が「婉孌」という言葉と深く関わっているのである。次に挙げる劉眘虚に対する殷璠の評価の中から、そのことが見えてくる。

眘虚詩、情幽興遠、思苦詞奇、忽有所得、便驚衆聴。頃東南高唱者十数人、然声律婉態、無出其右。唯気骨不逮諸公。自永明已還、可傑立江表。至如『松色空照水、経声時有人』、又…（中略・筆者）…、並方外之言也。惜其不永、天碎国宝。

傍線部「頃ごろ東南の高唱する者十数人あり、然れども声律婉態なるは、其の右に出る無し」では、劉眘虚の詩は声律面において、他の追随を許さないほど「婉」なる態だ、つまり柔らかさをもっていると誉めたたえている。しかし、そのような表現だけだと柔らかすぎる詩になってしまうということであろう。「唯だ気骨のみ諸公に逮ばず」と、内容的には「気骨」という堅さが無いと、その詩の欠点を指摘しているのである。

このような論評から「婉孌」が詩の声律面に関係しており、しかも「声律」面が詩の全体の雰囲気を決定づける要素となっていることが分かる。つまり、「婉孌」である崔国輔の詩は、特に楽府が優れていると判断されていた。そ

して「楽府」の優れたものとは、声律面が優れているものであったということである。

これらのことから、「婉孌」が意味するところを整理すれば次のようになる。

崔国輔の詩は、声律面をも含む言葉の用い方に対する配慮から、若々しい女性のような美しさ、という雰囲気を醸し出しており、それを殷璠は「婉孌」という言葉で表現したのだと考えられる。勿論それはプラスの価値として評価されている。

五　殷璠における「軽艶」と「婉孌」との差異

先に崔国輔詩の具体的な例として「魏宮詞」を読んだ。一読すると、それはただ宮女の日常の一こまを詠み込んだだけのもののようであった。もしこの詩がそれだけの詩であったとしたら、他でもなく、殷璠が批判するところの「軽艶」なる「宮体詩」に過ぎないと判断されたのであろう。しかし、崔国輔の詩には、ややもすると見過ごしてしまいそうではあるけれども、しかし確かに諷刺が込められているのである。

「軽艶」なる詩についての小尾氏の言葉を借りれば、崔国輔の詩には一見「深刻味がなく、きれいごとにできて」いるかに見える。しかし、実際には「深きこと宜しく諷味すべ」き「かみしめて味わったほうがよい」「深い内容を持っている」のである。そしてそうであるが故に崔国輔の詩は、殷璠が批判してやまない、当時流行していた「軽艶」なる「宮体詩」とは似て非なるものだったのであろう。

詩にしっかりとした内容があるかないか、これが殷璠にとって最も重要なポイントだったようである。それは『河岳英霊集』敘の冒頭に、次のようにはっきりと述べられている。

詩には神来・気来・情来があって、雅体・野体・鄙体・俗体がある。詩集を編纂するものはその作品がどの「体」なのかをきちんと見極め、その作品がどの「来」なのかを明らかにすることができて、はじめて作品の優劣を判断できるし、どれを採用しどれを採用しないかを決めることができる。

夫文有神来・気来・情来、有雅体・野体・鄙体・俗体。編紀者能審鑒諸体、委詳所来、方可定其優劣、論其取捨。

その作品がどの「来」なのか、すなわち詩人の主体である何からその詩が作られているのかを明らかにすることができて、はじめて作品の優劣を判断できる、というのが、殷璠が詩を取捨選択する際の基準なのである。(5)

最後に結論として以上のことをまとめると次のようになる。

第一に、崔国輔の詩は、声律面をも含む言葉の用い方に対する配慮から、若々しい女性のような美しさ、という雰囲気を醸し出しており、そのことを殷璠は「婉孌」という言葉でプラスに評価している。そして第二に、「軽艶」とは、綺麗で調子よく軽快な、しかしそれだけでしかない南朝風の「宮体」詩の特徴を表しており、この「軽艶」を、殷璠は否定的な評価を表す言葉として用いている。

このように殷璠は、梁代以降に流行する「軽艶」なる「宮体」詩を批判している。それに対して、崔国輔の詩は、「深」い内容、すなわち諷刺が込められており、その表現は「婉孌」であると評価している。殷璠は、このような内容がある上での表現面の潤色を是としていたのである。

また今回取りあげた「婉孌」に限らず、殷璠の詩論を全体として考えた場合には、殷璠にとっての詩というものがよりはっきりと見えてくるように思う。殷璠は、詩人の「気」や「情」などの、詩人の主体が含まれている詩こそが本物の詩だと考えていたと考えられるのである。しかしそのことについて論ずるのは小論の範囲を超えている。拙論ではこれまでにして、論を閉じたいと思う。

おわりに

このように、「婉孌」という言葉一つを取り上げてみても、時代の風潮や詩のあるべき姿についての、唐代人・殷璠の唐代人としての評価が見えてくる。今後、『河岳英霊集』の検討をさら進めていけば、殷璠に限らず唐代人の同時代人の詩に対する見方がより鮮明になってくるものと、筆者は考えている。今回「清楚」については検討できなかった。ただ「清楚」という言葉が、「婉孌」と同様にやはりその内容について論評する言葉ではないこと、そして表現面に対してプラスの評価を表す言葉であることは推測できるものと思う。そして、「清楚」という言葉についての検討が進めば、崔国輔に対するこのような評価はより明確なものになるものと思われる。それは今後の課題としたい。

(1)『河岳英霊集』の原文については北京・国家図書館蔵の宋本『河岳英霊集』(中華書局が「中華再造善本」として出版)に従い、諸本を適宜参照した。

『唐詩紀事』巻十五が「殷璠語」として引くものでは「楽府数章」の下に「雖絶句然」という四文字が入っている。

また「不能過也」という箇所については、四部叢刊本・明刊本・汲古閣刊本の『河岳英霊集』では「不及也」に作っている。

『唐詩紀事』では「不能過也」に作っている。

(2)『丹陽集』とは、殷璠が『河岳英霊集』を編む前に、自らの故郷である丹陽の、十八人の詩人の詩と詩評を編んだもの、一巻。すでに散逸している。『吟窗雑録』等に所引の詩文を集めたものに、陳尚君「殷璠『丹陽集』輯考」がある。(中国社会科学出

版社『唐代文学叢考』一九九七年・所収）

（3）戸田浩暁『文心雕龍』明治書院 新釈漢文大系

（4）興膳宏訳『陶淵明 文心雕龍』筑摩書房 世界古典文学全集

（5）このことについては排論「『河岳英霊集』における「術語」の用い方から見た殷璠の詩論」（大東文化大学中国学論集』第二十二号・二〇〇五年三月）に詳述してある。参照されたい。